

雑歌：文苑

著者	蘆舟，芝峯，桃江
雑誌名	龍南會雜誌
巻	7 5
ページ	6 2 - 6 3
発行年	1899-11-25
その他の言語のタイトル	雑歌：文苑
URL	http://hdl.handle.net/2298/5417

やかておく霜にかるとも知るらめやなまめきたてる秋の野の花
れのつから野守か宿となりけり庭に千草の花ささしより
とりいてつむへき花はなけれどもころひかる秋の野邊かな

菅公

うつり香を君かみかけとしたひけん心つくしのなつかまきかな
つくまかた遠き波間にいる月も影めくるなり花の都に
白雪と花はこそちれ飛梅のさよきかをりはうせすそありける
しからみもとよめかねたる梅の花香は末までも流れたとせす

雑歌

時雨

うら枯れし草葉の末におく露はよひの時雨の名残なるらん

初雁

天の戸を雁なきわたる今ははや秋を來ぬらしつくしぢの里

秋野遊

路遠し日もくれかゝるや上野守一夜宿かせ花のふしどに
けふもまたおもはぬ里に宿りけり花の千草にころひかれて

波間月

蘆 舟 江 桃 蘆 舟 江 眞 榮 盛 舟 江 芝 峯 舟

名にしおはくもらさらまし住の紅のうらにたよふ秋の夜の月

時雨

かたまきて暫しと結ふ故郷の夢おとろかす夜半の村雨

風前初雁

ふさわたる風のためよりにさきたちて秋きにけりとはつかりのなく

雲間月

まさやけき月にねたみやかゝるらむはれてはくもる横雲のそら

暮山紅葉

暮かゝる野山のすそのもみち葉は猶れく霜に染めんとすらん

聯句

白菊の花は垣根に残れども

訪ふ人もなき山の下庵

青つゝらくる人もなき山里に

れどなふものは落葉なりけり

ちりてゆく花の姿を見せまどや

霞こめたり春のやまさと

秋の野の千種の花にれく露は

桃

江

桃

江

芝

峯

芝

峯

桃

江

芝

峰

桃

江

桃

江